

佛教文化

BUKKYO

BUNKA

東京国際仏教塾刊

第166号



敦煌莫高窟220窟「阿弥陀經變図」観世音菩薩と聖者たち

1948年に宋代の壁画を剥がした際にでてきたもので、今も鮮明な唐代初期の壁画が残る。撮影／大洞龍明

義に依る

義に依りて

語に依るべからず

語をもつて義を得るも

語は義に非ざるなり

指をさして

月を知らしめんとするに

指をみて

月を視ざるが如し

(鳩摩羅什訳・大智度論)

※義とは義理・道理のことで仏の教えそのものをいう

二十六期スクーリング講義録（ダイジェスト版）

日本 仏 教 史

東京大学大学院教授 萩輪顯量 先生



はじめに—佛教の伝来

日本佛教諸宗派の教えについて、具体的に現在存在している宗派が、どのような教えを標榜しているのかということを中心に、お話をいたします。

日本に佛教が伝わってくるのは、だいたい六世紀の前半といいます。三説ほどあります。日本に佛教が伝わってくるのは、だいたい五三八年、五四八年、五五二年という三つの年代が出されます。これは、お隣の朝鮮半島、百濟の国から、当時の王様でありました聖明王が、仏像、幡蓋、經典等を最初に伝えたというのが、日本への公式の佛教伝来ということになっています。

でも、仏像が伝わったから、佛教が伝わったとは、簡単にいうことはできません。これは現在の東南アジアの上座系の佛教の中に伝わっている考え方と比較しますと、ずいぶん違うところです。現在の東南アジアの佛教界では、その地域にサンガが成立して初めて佛教が伝わったと考えていました。つまりお坊さんたちの集団がそこに成立して、如法の生活がそこで始まり、現地の人たちの中から出家者が登場してくると、これで初めて佛教が伝わったと、今でも言つて

います。従つて、日本の古代に、佛教が伝わったというときに、仏像が伝わったとか、經典が伝わったということが、最初だと思われることが多いですけれども、少し考え直さなければならぬところがあると思います。

その後、五八〇年代から、日本で最初の寺院とされます法興寺、別名元興寺（現在の桜井市の飛鳥寺）と呼ばれるお寺が出来上ります。おそらく日本で最初に造られた寺院であると考えられています。そして、サンガ形式の佛教が日本の社会の中に出来上がつてくるのは、もう少し遅く、中国で学んだ道昭というお坊さんが、初めてサンガ形式の佛教を法興寺で始めるようになつたと言われています。現在の東南アジアの佛教者たちが持つている基準に照らしますと、日本に本当の意味での佛教が伝わったというのは、七世紀の半ば過ぎくらいのことになります。寺院が初めてできたのが五七〇～五八〇年代、実際にサンガ形式の佛教が本格的に始まったのが、六六〇～六七〇年と考えられ、おそらくそのときから日本の社会の中に、佛教が大きな影響を与えていったと考えられます。六六〇～六七〇年代というのは、天智天皇から、天武、持統と続く時代ですが、この時代に天皇

制の基ができ、佛教も朝廷によつてかなり重要な宗教として位置付けられています。

日本に入ってきた佛教が、最初はどういう佛教であったのかといいますと、「空」の教えを強調する三論系の佛教が日本の社会の中に入ります。道昭さんが、日本に帰つてくるのは六〇〇年ですが、道昭さんは中国で玄奘三蔵について勉強しています。玄奘三蔵の法相宗の教えを日本にもたらします。法相宗は、私たちの心が認識している世界が存在するにしかすぎないと

いう、「唯識」を強調いたします。従つて、日本に入ってきた佛教というのは、空を強調する派と、唯識を強調する派が最初期に入つてきましたことになります。実際に、この三論宗の中心となる經典は、『中論』、『百論』、『十二門論』です。その三つの論書を研究するのが三論宗でした。法相宗は、『瑜伽師地論』、『解深密經』、『成唯識論』といった資料があり、それを研究する派です。この二つの派というのは、インド佛教の「中觀派」と「唯識學派」という流れをそのまま受けている感じです。それが東アジア世界の中国に伝わり、日本に伝わつてくるときにも、初期においては、インドからの二つの大きな流れが順次に紹介され、日本の佛教界に定着していきました。

道昭さんのときに大事なことがもう一つありました。教理的なものと、もう一つ修行の観点、いわゆる「禪觀」というものが本格的に伝えられます。それで、日本の佛教は古代から二つの方向性を持つて研鑽されるようになつていきました。いわゆる学問として勉強をする世界と、実

際に自分が体験していく、修行していく世界です。その二つが仏教にとって大事だという認識を持ちながら展開していきます。それで、勉強の方面は「学」という名前で呼ばれます。「教」という言葉で表現されることもあります。それから「行」、自分の心を見詰める修行の方面です。「学と行」という言い方がされますが、いわゆる經典を勉強するという在り方と、それから禪觀、これは修行ですけれども、修行の内容は基本的に「止」と「觀」という二つのものから成ります。天台宗が非常に大事にする定石の『摩訶止觀』の止と觀です。心の働きを静めていくのが止、心の働きをありのままに全部気付いていこうとするのが觀です。

この止と觀を実習することによって、私たちの心は少しづつ変化をしていきます。最終的にどういう境地を体験するかといいますと、いわゆる悟りといわれる境地に到達するわけになります。その悟りの境地とは、見ているようだけれども見ていないような境地とか、聞いているけれども聞いていないような境地などと説明されます。大事なのは基本的に実際の行をきっちりやることによって、心のある境地をきちんと体験していくこと。それによって私たちが日常生活の中で感じているさまざま苦しみ等から脱却していくこと、これが一番求められていたのだろうと考えられます。

八世紀に入りますと、中国から非常に有名なお坊さんである、鑑真という方がやつてきます。鑑真さんは戒律を伝えたといわれます。律宗の祖にされますが、入門の儀式のときに、伝統的なやり方を初めて日本の社会に伝えたのは、この鑑真さんだといわれます。そのときから律宗

通の要素ですが、生活スタイルを規定する授戒が、日本の社会に定着するようになっていきます。

天台宗の教え

そこに、平安時代初期に、中国からまた新しい仏教が紹介されます。それが天台宗と真言宗です。さて、三論宗や法相宗は、今の奈良三論宗や法相宗のお寺は、日本各地にあります。その当時はまだ宗派意識が強くありませんから、お坊さんたちは共通の理解を持つていて、自分たちは仏教者として大きなまとまりの中に居て、ただ勉強として教の世界でやるときに、自分の関心に従つて三論宗、あるいは法相宗を勉強する。でも、修行の上では、止や觀といわれる伝統的なものをやつっていました。そのうちに、お坊さんたちの生活スタイル、あるいは入門の儀礼を規定するものがしつかり出来ていないうのを作りますが、とにかく『法華經』を重視します。もう一つ大事な点は、修行道の点で『摩訶止觀』という資料を、天台のお弟子の章安大師灌頂という方がまとめたといわれています。学問の方面では『法華玄義』、『法華文句』といふ注釈書として『法華經』、修行道の面では『摩訶止觀』という著作に基づいて、「一心三觀」という心を見詰める修行をとても大事にして、初めて、如法の授戒が出来上がります。これが八世紀半ば過ぎ、七五四年か七五五年頃から、日本の社会に授戒の制度がしつかりと出来上がつきました。

やがて天台宗、真言宗が、平安時代の新しい仏教として登場してきました。法相宗と三論宗が並立するという流れで見ていきますと、天台宗と真言宗も、新しい教学的な部分と、独自な集団としての部分があるような気がいたします。でも、基本的にはお坊さんたちとしては一つのまとまりみたいな意識がありまして、その中に新しい感覚の教えが登場してきたのだろうと思ひます。

でも、今、目の前にある教卓は、こういう形

最初の天台宗というのは、伝教大師最澄によって日本に伝えられました。最澄さんは何を特に強調したかなんですが、中国で成立した天台宗の天台大師智顗がお説きになられたものを、とても大切なものとして受け止めます。そのときに天台宗は何が一番大事かというと『法華經』をとても重要な經典だと考えます。『法華經』の注釈書として『法華玄義』、『法華文句』というのを作りますが、とにかく『法華經』を重視します。もう一つ大事な点は、修行道の点で『摩訶止觀』という資料を、天台のお弟子の章安大師灌頂という方がまとめたといわれています。学問の方面では『法華經』、修行道の面では『摩訶止觀』という著作に基づいて、「一心三觀」という心を見詰める修行をとても大事にします。私たちの心を見詰めていくときに、「空・假・中」という三つの観点から見ることができるという考え方を出してきます。空とは、実体として存在しないことです。何が実体として存在しないかというと、私たちの心の働きもそうですし、身の回りに存在している事物も、実体を持たない假のものなんだ、変化していくものだ、として捉えられています。でも、実体を持たないといつても、必ず目の前にある形を持つて現れているんですね。例えば今私の目の前にある教卓ですが、天台宗の考え方でいえば、これ空なるものですから、実体を持たない、永遠不変ではないんですね。それが空です。

を持つて、それで、ある働きをちゃんと成して、いるわけです。何の働きを成して、かというと、いろいろなものが乗つかつて、います。乗せることができる、という働きを持っています。その働きを持つある形を目の前に現していますよ、といふのが仮です。そして、真実の立場というのは、その両方に拘泥しない立場で、これを中といいます。空・仮・中の在り方が、私たちの心なんだ、ということを、心を観察しながら確認していく、というのが、一心三觀といわれます。これは修行の中で、私たちの心は空である、私たちの心は仮のものであり、真実は中であると確認していく、ようなことも、実際の修行の中に登場してきます。基本は『法華經』と『摩訶止觀』を重視して、片方は教の世界、もう一方は行の世界である。この教と行の世界が車の両輪のよう、に展開していくところに、天台宗の教えはできています。

ところが、日本の天台宗はもう一つ興味深い視点を入れて、密教を取り込みます。密教というのは、インドにおいて、六世紀、あるいはもう少し後かもしれません。玄奘三蔵法師の時はあまりいわれていませんが、七世紀には確実にインドの世界に登場してきます。仏教がどんな感じで存在してたのかと言いますと、お釈迦様の時代には、商工業階級の人たちが外護者であったといわれています。時代が下つていくにつれて、インドの社会において、交易が衰退していく時代に、仏教者たちは支え手として、在地の人たちを取り込むようになつたと考えられます。在地ですからたぶん農民です。その人たちの中に存在していた信仰を、仏教者も取り入れていった。その中で非常に興味深いも

のは、バラモンがやつていた伝統的な儀式です。典型的なものが、火を焚いて、そこに供物を入れ、煙と一緒に神様に届けるというバラモンの儀式です。それが護摩といいうものになつて、いきうのが仮です。そして、真実の立場というのは、その両方に拘泥しない立場で、これを中といいます。空・仮・中の在り方が、私たちの心なんだ、ということを、心を観察しながら確認していく、というのが、一心三觀といわれます。これは修行の中で、私たちの心は空である、私たちの心は仮のものであり、真実は中であると確認していく、ようなことも、実際の修行の中に登場してきます。基本は『法華經』と『摩訶止觀』を重視して、片方は教の世界、もう一方は行の世界である。この教と行の世界が車の両輪のよう、に展開していくところに、天台宗の教えはできています。

もう一つは印と真言です。手にある形を結んで、それが悟りを得た仏さんと同じ形であり、それが悟りそのものになることだ、という、象徴主義的なことをやります。また口には真言を唱える、これが密教の特徴といつていいと思います。もともと仏教の中にこういうのは無かつたのですが、ある時期から仏教者たちが取り入れていかざるを得なくなつた。あるいは普通の人たちの中に存在していた、言葉に対する信仰みたいなものも取り込まれていつたのではないかと思われます。

新しい形式の入り込んだ仏教が、唐の時代に中国へ伝えられ展開します。そしてその新しく流行した仏教を、最澄さんが中国に渡つたときに、密教的な要素を最先端の仏教として取り込んでいるはいくのです。でも真言宗の空海さんとは見解の相違みたいなものがありまして、独自の密教観をつくり上げていきます。どういう相違が生じたか、というと、天台宗では『法華經』を一番大事なものとして密教を取り込んでいくのですが、真言宗の密教すなわち空海さんの密教と、少し相違させなきやいけないという感覚が入りまして、『蘇悉地經』、『大日經』、『金剛頂經』という三つのものを総合的に取り入れていく密教観をつくり上げていきます。

これは最澄さんの、少し後の世代がつくり上げましたが、「蘇悉地部」、「胎藏部」、「金剛部」の三部の密教となります。それでいながら常に『法華經』が一番大事だと主張いたします。これが真言宗と違うところであります。そして天台宗の密教は「台密」という名前で呼ばれることがあります。真言宗の密教は空海さんが始めたのですが、拠点とされた寺院が京都の東寺、教王護国寺でありますので、「東密」という名前で呼ばれます。従つて、天台宗の教えの中では『法華經』がいつも関心事になつておらず、空海さんが伝えてきた真言宗との違いを出すために、三部の密教を大事にしようとします。

もう一点、日本天台宗の特徴としていえるのは「梵網戒」を使うことです。授戒のときに、即ち一人前のお坊さんになるのに梵網戒のみで十分だと主張しました。いわゆる律藏に説かれる「具足戒」は小乗の戒律である、しかし天台宗は大乗の教えである、だから、大乗独自の戒律が必要なんだと先鋭的な考え方を出し、「大乘戒」を主張いたします。これも日本天台宗の大きな特徴になると思います。それが「梵網戒」とも、「菩薩戒」ともいわれ、天台宗ではみんなが守らなければいけない戒律として強調されます。「不殺生」、「不偷盜」、「不邪淫」、「不妄語」、「不酷酒」。それから、「不說罪過戒」、「不自讚毀他戒」、「不憚法財戒」、「不瞋恚戒」、「不謗三寶戒」という十の大乗の戒律を守ることをいいます。

また、天台宗では修行のときには護摩を焚いたり、あるいは、空・仮・中の三觀を体得、体現するために、心の観察を行つたりして、います。その教えとは、教学的には『法華經』を重視するのですが、その中でも特に一心三觀とい

い、自分の心の中に世の中一切のものが空なる在り方、仮なる在り方、それから中なる在り方をしているということを、心の中で確認するというやり方を推奨していきます。

真言宗の教え

それでは、真言宗は何を強調したのか。唐代の始めに中国に紹介され、盛唐期に盛んになつた密教を、正面から受け止めます。誰が伝えてきたのかというと空海です。空海さんは伝教大師最澄さんと一緒に七九四年の遣唐船で中国に渡っています。

空海は当時の都である長安まで入り、盛んになつていた密教を中心に、正面から学んできました。『大日經』という経典に説かれる「胎藏部」の密教、それから『金剛頂經』という経典によつて説かれる「金剛部」の二つの密教を学びます。胎藏部と金剛部の、この二つの密教という流れが存在しているのですが、本来はインドの時代には全然別の所で成立してますから、教えの中身が少し違います。片方は慈悲を、もう一方は智慧を中心になると言われます。教えの内容も、その成立の経緯、流れも全然違います。空海さんの偉いところは、少し強引なのですが、その違う二つのものは同じことを言つているのだと言えました。これを「金胎不二」といいます。金剛界と胎藏界の教えは一致する。不二ですから二ではない。とにかく金胎不二であると主張をいたします。この考えは、中国ではなかったことですので、空海さんの独創だと思ひます。空海さんはさまざまな経典の中で、密教経典の『大日經』と『金剛頂經』という二つの



建長寺

経典が一番優れたものだと唱えます。その二つのものが別々のものではなくて、不二なるものだと位置付け、金胎不二の密教をつくり上げていきます。空海の密教は、東寺を中心にして広まりますので、東密という言葉で表現いたします。空海さんは『十住心論』を書いています。それが以前までに存在した仏教経典や教えを十個の段階に分けて位置付けます。『十住心論』では、子どものような幼い境地を説いている教えから、仏教の中に入つてきて少しずつ深い教えになつていくんだと位置づけます。天台宗の教えが第八番目に来て、その次に東大寺でずっと伝授されてきた華厳の教えが第九番目にきます。最後

に真言の教えが位置付けられています。教判論といいますが、日本に伝わつていただきさまざまな経典を、独自の視点から位置付けています。空海さんは最後の真言宗、「大日經」や「金剛頂經」に基づいて出来上がつた真言の教えが、仏教の中で一番優れているというわけです。

こういう考え方も基本的には教の世界、学問としての世界です。実践という点では、天台宗とほぼ同じであり、ホーマ（護摩）とブージャ（供養）とサーダナー（成就法）といわれる儀礼的なことや、同時に印を結び真言を唱えることもやります。ですから、教理的な違いは天台宗と比べると確かにあります。修行実践の方で比べてみると、細かい作法については違いますが、内容はあまり変わりません。真言宗が伝える行法の中に、例えば成就法というのがあります。その成就法にも、まず止や観をやりなさいという記述が出てきます。インドで成立した心を観察していく止や観の伝統というのが、そのまま密教の中にも流れているのです。

今、実際に真言宗の中でよく使われる修行法は「阿字觀」といわれるものです。代表的な瞑想法として挙げましたが、この「阿」の字を大きなうちわのようなものに書いて、これに支えを付けまして、台の上にくつつけます。そして「阿」の字をずっと見詰め続けていく行法をやっています。一つのものに心を集中させていくので、止の練習の一つです。真言宗の興味深い点は、止や観を実践するときには、文字を、心を結び付ける対象として初めて導入したことですね。「阿」という字を目の前に置くことによって、そこに集中していく。止というのは心を一つの対象に結び付ける止です。その練習として

この阿字觀というのが、真言宗の中で、初步のところで登場してきます。

こうして、平安時代初期に天台宗と真言宗という新しい二つの派が登場し、日本の中に広まつていきます。日本全国津々浦々のお寺が、奈良時代に存在していた三論系と法相系の勉強をする寺院と、新しく入ってきた天台宗と真言宗を勉強する寺院とに分かれて、日本全国に展開していきます。例えば天台宗が日本に入ってきたて、それ以前にあつたお寺が、天台宗に変わつたという例も存在します。一番有名なのは、今年が六十年に一遍の遷宮の年ですが、出雲大社の裏手にある、島根県出雲の鰐淵寺というお寺が、最澄さんが日本天台宗を開いてから間もなく天台宗に変わつた、比叡山の末寺第一号だといわれています。

その後も天台宗のお寺として有名なものは、山形県の立石寺です。お弟子さんの慈覚大師によって開かれたといわれていますが、これは天台宗の教えを守る寺院として成立しました。真言宗の寺院も日本全国に出来上がっていきます。それ以前から存在していた法相系の寺院が、真言宗に変わつた所もありますし、独自に造られて真言宗の寺院となつた所もあります。有名なものは、空海さんのときに造られた高野山の金剛峯寺です。教えとしてはそれ独自のものを持つていますが、実践としては、基本的には全部、止と觀の範疇から出ないような感じがいたします。

浄土宗の教え

もう一つ気になるのは、平安時代に、浄土教

が登場します。今、私たちは浄土宗という宗派で考えていますが、平安時代にはまだ浄土の教えというのは、一宗としては独立していません。教としては独立していません。教としては、基本上には、教学的に勉強するものではなくて、行動的には、教学的に勉強するものではなくて、行動として実践するものでした。

いつたいどんな実践をしたのでしょうか。これは二つあります。観相の念佛と称名の念佛です。心の中に淨土の姿を思い浮かべる念佛が「觀相念佛」です。この中には『觀無量壽經』に説かれる「十六想觀」というのがあり、有名



なのは「水想觀」とか、「日想觀」といわれるものです。もう一つは「称名念佛」です。称名念佛というのは、口に「南無阿弥陀仏」と唱えることです。觀相の念佛は淨土の様子を心の中に思い浮かべていくことですから、阿弥陀様の淨土、極楽世界を心の中に思い浮かべて、それをずっと見詰め続けていく行です。そのときには、手がかりになるものがないとやりにくいですから、曼荼羅を置きます。「淨土曼荼羅」といいますが、有名なものに奈良の元興寺に伝わった「智光曼荼羅」や、当麻寺に伝わった「當麻曼荼羅」というのがあります。智光曼荼羅や當麻曼荼羅のように、淨土の様子を描いたものを目の前に置いて、淨土の有り様を心に思い浮かべていくというやり方をしました。

称名念佛は、これも行として実践するものだと考えられています。「南—無—阿—弥—陀—」というような感じでゆっくりと唱えることによって、自分の心を静かにしていくというやり方をしていました。淨土教というのは、教としては独立していない時代が長く存在して、行として実践するものでした。称名念佛は行の世界じやなくて、感謝の念佛だと聞いたことがあります。思いいますが、行の意味合いがあつたということを忘れてしまいがちです。奈良、平安期の淨土教というのは教として独立していませんから、法相系や三論系、あるいは天台系や、真言系のお坊さんたちも、淨土の教えを受容してしまって、具体的には觀相念佛や称名念佛として行の世界として実践していました。何を目指してたのかというと、悟りを目指して実践するものだと位置付けられていたのです。この流れに大きな変化をもたらす人物が中世

の初頭に登場します。平安時代末期といつてもいいのかもしませんが、院政期から活躍をします法然さんです。法然さんが浄土の教えに大きな転換点をもたらしたといわれています。法然さんは、一大佛教聖典を二つのタイプに分けた教判を作ります。浄土の教えとそれ以外の教えに分け、中でも浄土の教えが末法の時代に誰もが実践できる教えだと位置付けます。聖道門と淨土門の二つです。法然上人は、称名念佛こそが末法の時代に残された唯一の行であり、唯一凡夫にできる行であるとしました。ですから念佛は、実際には行だという意識を持つていています。

法然上人の教えを典型的に表す言葉として、「念佛為先」という言葉が伝えられます。念佛が一番大事なので、念佛を先にしますよ、とうことです。実際に法然上人は日に一万遍、お念佛を唱えていたといわれます。実際に阿弥陀様に救い取つていただいて、浄土に往生するということしか凡夫に残された道は無いと、末法思想の中で考えられたといいます。称名念佛こそが一番大事な行であり、それ以外のさまざまな伝統的な止や觀の行法などは、末法の時代の凡夫には実践できないのだと、凡夫が実践できるのは念佛だけであるといわれています。法然上人は、中国の浄土教の大成者といわれる善導さんの教えを重視して、称名念佛こそが唯一凡夫にできる行であり、これによって浄土に往生することができるという、新しい考え方を出してきました。

このときに浄土の教えが教として独立したと評価されています。鎌倉時代に、凝然さんという有名なお坊さんが、『淨土法門源流章』とい

う本を書いています。鎌倉時代のお坊さんが遡る形で浄土の流れを整理しているのですが、その中に浄土教は法然上人のところで大きく変わったと述べています。このときに行として実践するものであつた念佛が、教の世界に転換していくきます。この段階では、法然上人は念佛が大事であると説き、実際に唱えることをすごく大事にしていました。

ところで、法然上人が勉強した比叡山における念佛の唱え方は、かなりゆつくりとしたものです。天台宗の行法の中に「四種三昧」というのがあります。その中に「常行三昧」というのがあります。常行三昧は「仏立三昧」、あるいは「念佛三昧」という言葉もありますが、どのように唱えるのかというと、今のやり方を見ても分かりますがゆつくりなんです。「步步声声念佛」という言葉が伝わっていまして、一步一歩、一念一念、一声一声という意味なのです。これは天台宗の四種三昧の中の常行三昧に伝わっている言葉です。念佛を唱えるときの大変なことですので、一步一步、歩きながら声に出していきます。心でそこに集中してくるように、ですから、一步で「南！」、もう一步で「無！」、もう一步で「阿！」という感じで、大変にゆっくり唱える念佛が比叡山の伝統として伝わってきました。法然上人もおそらくその当時のゆつくり唱える念佛の在り方というのを知っていたはずです。でも、実際に凡夫にできる行とは、称名念佛だけであると位置付けられ、日に一万遍以上の念佛を唱えていたといわれますから、本当に唱えるという行の世界をまだ残した念佛を勧めていたのだと思います。

浄土真宗の教え

ところが、法然さんのお弟子である、親鸞さんの教えでは、これがどのように変わっていったのかといいますと、親鸞さんの一番大事にされているのは、阿弥陀様が私たちを救つてくれます。第十八願という有名な願にあります。法然さんも四十八願はとても大事なものとして位置付けているのですが、親鸞さんになりますと、中でも第十八願が法然さん以上に強調されるようになります。この世の中の一切衆生が悟りを開くのでなければ私は悟りを開きません、といふ誓いを阿弥陀様の前身である法藏比丘が立てられました。その法藏比丘の請願が四十八願といわれるのですが、そのうちの第十八番目の請願が、この世の中の一切衆生が悟りを開くのでなければ私は悟りを開きません、ということです。ところが、その後に法藏菩薩は阿弥陀様になつていて、ですから、四十八個の願は全部成就している。私たちは既に仏になつている存在なんだよ、という論理が成立するわけであります。ところが、その後に法藏菩薩は阿弥陀様になつていて、ですから、四十八個の願は全部成就している。私たちは既に仏になつている存在なんだよ、という論理が成立するわけであります。親鸞聖人はその本願を信じること、これが念佛を唱えるという行為よりも、もつと大事なことだと位置付けられ、信心が一番大事だという「信心為本」の教えができあがります。ですから、浄土真宗の場合には、私たちの心が一番大事であり、信じることができるというのが一番大事だということになります。

禅宗の教え

その後登場してくるのは禅宗です。禅宗の教

えは淨土の教えとはかなり異なるところがあり、行の実践をすごく大事にしますが、二つの特徴があります。今は臨済禪と曹洞禪に分かれていましたが、臨済禪や曹洞禪も一番根底に置いている発想は共通しています。何を一番根底に置いているかというと、私たち自身が仏に他ならないというところから出発します。大前提は、修行しようと考へて、心の働きが生じないのですから、心の働きが静まつていくのです。そのような使い方をするのが、宗の時代に出来上がった禅宗の工夫です。実際に「仏とは何か」という公案が与えられた、ああでもない、こうでもないと考へるうちに、はたと、自分の心がいろいろと考へてあるといふことには、はたと、自分の心がいろいろと悟りがあるのではなくて、自分の中に既に悟りがあるのです。そこから出発していくのです。その自覚の下に臨済禪と曹洞禪では、やり方を工夫しました。

臨済禪は、別名「公案禪」とか、「看話禪」という言い方をします。

公案と看話といいますけれども、絶対矛盾の問題を使って、心を一つの対象に結び付けるために、それを心の中に抱き続けるというやり方をさせます。例えば臨済宗のお寺に行き、和尚さんから、「狗子に仏性ありや」という公案を参究しなさい、といわれたりするのですね。何にも説明されないで公案だけを与えられると、答えなきやいけないと思つていろいろと考えるわけです。公案禪や看話禪というのは、まず心の中にいただいて、狗子に仮性ありや、犬も動物で人間と一緒にだからあるのぢやないかななどと思つて、ありといふうに考えたり、でも、人間と違うから無いのぢやないかなとか、こんなふうに考へていくと駄目です。公案というのは、答えを求めるのではなくて、心の働きを一つの対象に結び付ける工夫として

登場します。

これが公案禪や看話禪の興味深い点です。一つのものに心の働きを集中していくことによつて、他の働きが生じないのですから、心の働きが静まつていくのです。そのような使い方をするのが、宗の時代に出来上がった禅宗の工夫です。実際に「仏とは何か」という公案が与えられた、ああでもない、こうでもないと考へるうちに、はたと、自分の心がいろいろと考へてあるといふことには、はたと、自分の心がいろいろと悟りがあるのです。人間の心がさまざまな働きを起こしてることに自分で気付くことができますので、一つの悟りになるところがあります。しかし、本来は絶対矛盾の問題も心の中にはそれでまたいいのです。人間の心がさまざまな働きを起こしてると、それだけで、一つの悟りになるところがあります。しかし、本来は絶対矛盾の問題も心の中にはそれでまたいいのです。人間の心がさまざま

な働きを起こしてると、それだけで、一つの悟りになるところがあります。しかし、本来は絶対矛盾の問題も心の中にはそれでまたいいのです。人間の心がさまざま



鎌倉大佛

すれば良いという言い方をしますが、曹洞禪は、心に生じてくるさまざまなものを見つめ続けるというやり方をします。別名「黙照禪」といい、宏智正覺から始まつたといわれます。ただじつと坐つて心に生じてくるさまざまなものを見つめ続けていく。その境地といふのは『從容録』という禅宗の資料の中で、大事な境地とはどんな境地ですか、に対し、口バが井戸を見ているようなどと、示されます。中国で口バといふと、愚鈍な動物の代表とされています。その愚鈍な動物が井戸をぼーっと見ているようなものであると。曹洞禪がやつてゐる瞑想の境地をどのように表現できるかといつたら、口バが井戸を見るようなものだと答えたといふのですね。ところが、それでは駄目だといふのです。

何が正解かといふと、「井の驢を見るが如し」、井戸が口バを見ているようなものでなければ駄目だといふのです。どこが違うかといふと、

口バが井戸を見ている、「驢の井を見るが如し」という表現と、「井の驢を見るが如し」と对比されるときには、まだ自分の心に何か作行為があるのです。心が自分で何かつくり出していく働きが存在しているのですが、口バが井戸を見てゐるときには、まだ自分の心に何か作行為があるのです。心が自分で何かつくり出していく働きが存在しているのですが、口バが井戸を見ているというニュアンスが、口バが井戸を見ているという言葉の中には入つています。ところが、無生物の井戸が口バを見ているようだと、まったくこの作行為が入らないのです。

つまり曹洞宗がいつてゐる黙照禪の世界といふのは、まったくこ

ちら側の作為が無くて、心に生じてくるものをただ眺め続けている境地が、大事な境地だよといつています。その境地は止と観の感覚からいきますと、観の世界にはほぼ一致するといつていよいとあります。ですから、曹洞宗の坐禅の中で見てる世界とは、こちら側が作為を加えずに、心の働きをずっと見つめ続けている境地です。それをすることによって、私たちは自分の心がつくり出しているさまざまな判断や丁別の世界があるということに気がつくようになってきます。それができると悟りの世界に一步入ってきます。そのところが、曹洞禪では黙照禪といい方をして、表現してるように感じがします。

臨済宗や曹洞宗の特徴としては、日常のさまざまなものをお行として認めていきますから、いわゆる「作業」といわれるものが、お行の一つとして入り込んでいます。朝起きてからの掃除、さまざまのが全部お様としての行なんだよ、という意識が入ってきますと、日常の営みがお行として認められるようになつていきます。禅宗のお寺に行きますと、日常の全てがお行であると位置付けますから、厳しくいろいろなことを一つ一つ心を込めて、一生懸命やりなさいというのをよく注意として受けます。

日蓮宗の教え

これ以外の宗派として大事なのは日蓮宗です。日蓮宗は『法華経』が一番大切だという世界から出発します。その意味では天台宗とまったく同じですが、違う点は何かというと、日蓮宗は「南無妙法蓮華経」という題目を唱えるという

ことに、大きな意味を認めたことです。「唱題成仏」という言葉が登場しますが、とにかくお題目を唱えることによつて、悟りの世界に至るという、非常に易行性を重視する教えとして展開していきます。天台宗は『法華経』以外の密教なども認めていますけども、日蓮宗は『法華経』中心主義に立ちます。これが違うところであります。そこが違うと、お題目を唱えることによつて、悟りの世界に入つていただけるのだとします。そのときには信が大事だということを強調します。

もう一つは、日常の職業を肯定するという言い方をしますが、「宮仕えを法華経とおぼしめせ」という言葉が日蓮さんの遺文の中に出でています。つまり日常の仕事に精励することが『法華経』を信じることと一緒なんですよ、という言い方がされます。それで、日常の職業といいますか、日常の仕事を正面から肯定していく側面を、日蓮さんの教えの中から読み取ることができます。つまり日常の仕事に精励することができます。お題目を唱える『法華経』こそが釈尊の真意であり、日常の仕事に精進することが、法華経を実践していることだという位置付けが、大きな意味を持つて現在に伝わつてているよう気がいたします。

おわりに

このように見ていくと、各宗派が独特的の感覚を持つていて、修行道という点から見ますと共通項がかなりあります。それは何かというと、心の働きを静めていくというのと、心の働きをありのままに全部気付いていくという、その部分はだいたいどの宗派でも説かれているといつていよいとあります。

このように見ていくと、各宗派が独特的の感覚を持つていて、修行道という点から見ますと共通項がかなりあります。それは何かというと、心の働きを静めていくというのと、心の働きをありのままに全部気付いていくという、その部分はだいたいどの宗派でも説かれているといつていよいとあります。

行の世界に関する視点というのが、あまり正面に出てこないのは浄土真宗です。親鸞さんも、本来は法然さんに付いてお念仏を唱えていますから、行の世界をちゃんと垣間見てるのですが、現在では「信心為本」の世界になつて、何を大事にするかというと、「何事もあなた任せの南無阿弥陀仏」です。「あなたの任せ」の「あなた」というのは阿弥陀様のことですが、全てを阿弥陀様にお任せするという境地をすごく大事にしています。このお任せするという境地は、どんなことが起きてても次の心の働きを起こさない。

私たちは普通嫌な言葉を聞いたら嫌だなと思つて、不愉快な思いを生じさせたり、ときには怒りの気持ちを生じさせたりします。ところが、何もかも阿弥陀様のお計らいなんだ、心底信じてやつていいのになつたら、どんなことを聞いても、たぶん怒りの気持ちを起こさずに、素直にそのまま受け止めていくのだろうと思ひます。

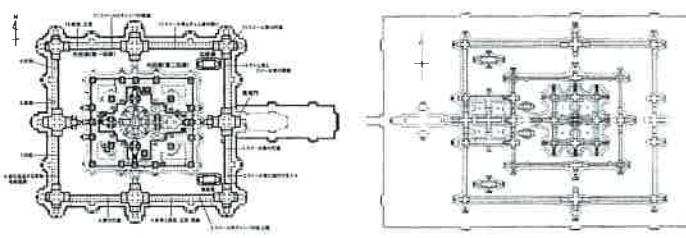
その境地というのは、考えてみると観が目標していた境地とほぼ近い。一致するといつてもいいと思います。実際にそうなれるかどうかは、本当に信心があるかどうかに掛かつてくると思いますけども、お任せをするということができれば、修行道の觀が目指していた世界とほぼ一致するといつていいと思います。ただ、教えていますけども、お任せをするということができれば、修行道の觀が目指していた世界とほぼ一致するといつていいと思います。ただ、教えていますけども、お任せをするということができれば、修行道の觀が目指していた世界とほぼ一致するといつていいと思います。ただ、教えていますけども、お任せをするということができれば、修行道の觀が目指していた世界とほぼ一致するといつていいと思います。ただ、教えていますけども、お任せをするといつていいと思います。

以上で終わります。

卒業生
だより

世界一周の船旅

十四期 須貝 光夫



アンコール・トム

アンコール・ワット

今年はマゼラン没後四九二年。期するところあつて四月一日、世界一周の船旅に出た。船はジャパングレイスのピースボートである。期間は七月十二日までの一〇三日間で、寄港した港は香港を皮切りにメキシコのマンサニージョまで二十二港。各地でコトバと肌色の違う多くの人々に出会い、多くの文化文物を見学し、深い感銘を受けた。特に印象に残つたのはカンボジアのアンコール遺跡、工

ラミッド群、ジプトのピラミッド群、アテネのパルテノン神殿、約二千年前ヴェスヴィオの火山噴火で一夜にして壊滅したナポリのポンペイ遺跡、バルセロナのサグラダ・ファミリア、ノルウェーの自然遺跡、ノブル美術館、フィヨルド、

世界一周の船旅に出た。船はジャパングレイスのピースボートである。期間は七月十二日までの一〇三日間で、寄港した港は香港を皮切りにメキシコのマンサニージョまで二十二港。各地でコトバと肌色の違う多くの人々に出会い、多くの文化文物を見学し、深い感銘を受けた。特に印象に残つたのはカンボジアのアンコール遺跡、工

ラミッド群、ジプトのピラミッド群、アテネのパルテノン神殿、約二千年前ヴェスヴィオの火山噴火で一夜にして壊滅したナポリのポンペイ遺跡、バルセロナのサグラダ・ファミリア、ノルウェーの自然遺跡、ノブル美術館、フィヨルド、

パナマの先住民族エンベラ村の訪問等々であつたが、とりわけアンコール遺跡群とサグラダ・ファミリアはかねがね一度訪れてみたいと思っていたため、感慨もひとしお大きかつた。

アンコール遺跡群はカンボジアのシェムリアップの北側にある遺跡で、九〇十四世紀初期にかけて栄えたクメール王朝の首都アンコールにある遺跡である。クメール王朝が一四三二年タイ(シャム)の侵攻によってアンコールを放棄したため、以来ヤングルの中に埋もれて廃墟と化したが、一八六〇年フランス人アンリ・ムトオの紹介によって脚光を浴び世界に知られるようになつた遺跡(世界遺産)である。以来ユネスコ等国際機関の協力を得ながらフランスを始め、日本、アメリカ、中国等により保存修復が行われている。遺跡は広大で大小六十余の遺跡があるが、特に人気のあるのはアンコール・ワット、アンコール・トム及びタ・プロームの三つである。

アンコール・ワットはこの遺跡群の中で唯一完全に残つているクメール芸術中最大の傑作である。建造したのは十二世紀初期、この地を統治していたスリヤヴァルマン二世である。三十余年の歳月



アンコール・ワット中央祠堂

をかけて、ヒンドゥー教の寺院として建設されたものだが、のち仏教に変更されている。他の遺跡がタイの侵攻によつて放棄され、廃墟と化した後も、この遺跡は仏教の靈場として信仰を集めていたらしく。カンボジア内戦の時クメール・ルージュがアンコール・ワットに逃げ込み、ここを砦として抵抗したため、祠堂の各所に安置されていた仏像が破壊され被害を受け、内乱終結後再び修復活動が行われ、往古の輝きを取り戻している。遺跡は東西約一五〇〇メートル、南北一三〇〇メートルで、周囲に幅二〇〇メートルの壕が巡らされている。構造は三重の回廊と中央に須弥山を模した六十五メートルの祠堂が建つている。ここに昇るには急勾配の長い階段を昇らなければならず、訪れる人の中には昇るのをためらつて下から見上げる人もいるほどである。

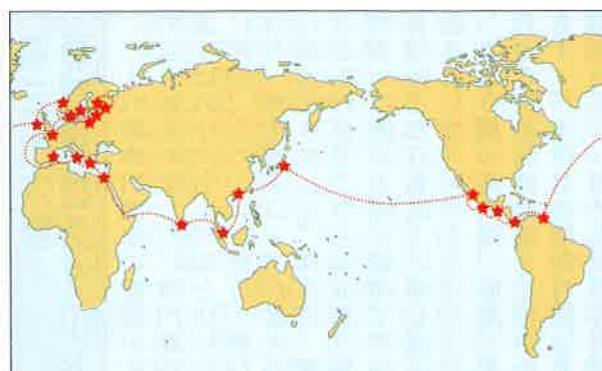
第三回廊の壁には、インドの叙事詩マハーバーラタ、ラーマーヤナの詩物語及び「神々と阿修羅の戦争」等々の浮き彫りが刻まれてゐる。この遺跡の北一五〇〇メートル、南北一四〇メートルの巨大な石造建築物である。その構造は複雑でとらえにくいか、三層の構造で、第一層に二重の回廊が設えられている。第二層には中央に十六の尖塔に囲まれた四十三メートルの祠堂が屹立している。その全体像は第一次世界大戦で倒れたところから見ることができるが、その壮大な石造建築物に圧倒される。

しかし、この寺院の最大の魅力は中央祠堂を取り囲んでいる十六基の尖塔である。側面に四つの觀

おり、この寺院の見所になつてゐる。又、細部の装飾には仏像やヒンドゥー教的なものだけでなく、西域的なものやクメールの王宮の舞姫をモデルにした女神が彫り込まれおり、国際色豊かな文化である。建築物の石材は接着剤なしで積み重ねられており、その構造は中央祠堂を一段高くして、幾何学的均齊美を強調した世界的にも珍しい建造物であると評価されている。

この遺跡の北一五〇〇メートルのところにシユメール王朝の都城アンコール・トムの遺跡がある。その中央に在るのがバイヨンと言われる仏教遺跡である。この遺跡は十二世紀末頃仏教信者であったジヤヤ・ヴァルマン七世がスリランカから小乗仏教を受容して建立了した寺院である。

規模は東西一六〇メートル、南北一四〇メートルの巨大な石造建築物である。その構造は複雑でとらえにくいか、三層の構造で、第一層に二重の回廊が設えられている。第二層には中央に十六の尖塔に囲まれた四十三メートルの祠堂が屹立している。その全体像は第一次世界大戦で倒れたところから見ることができるが、その壮大な石造建築物に圧倒される。



航行図

音菩薩像の顔が彫り込まれていることから四面塔とも言われている。中にこの寺院の宝物が入っているらしい。塔の高さは一様でないが、下に立っている人間から推定して十メートル前後もある。狭い通路に前後左右交錯して建つてある。第三層にも多くの尖塔が建つてあるが、どの塔にも音菩薩の顔が彫り込まれている。

この遺跡内に彫り込まれている音菩薩の像は諸説があつて定かではないが、私が現地のガイドから聞いた話によると一九六面あるということであつたが、その表情の同じものは一つもない。その多くが慈愛に満ちた表情をしており、世に「ケメールの微笑」と言われ



観音菩薩像

ている。顔の長さは短いもので一・七五メートル、長いものでは二・四メートルもある。

一体何の目的でこの奇妙な仏塔を建立したのか。狭い通路を、右に左に音菩薩の尊顔を仰ぎ見ながら歩いていると、不思議な魅力に囚われて音菩薩の妙音が塔間に木霊しているような錯覚にかられるのを感じ得なかつた。

タ・ブロームはこの遺跡の東隣にある仏教遺跡でジャヤ・ヴァルマン七世が母の冥福を祈つて建立了ものである。規模は三つの回廊を備えたかなり大きな遺跡であるが、ガジュマルの巨木が祠堂を覆つているため、殆ど修復が行われていず、創建当時の原型をとどめている貴重な遺跡である。

巨木の樹齢は大凡四〇〇年。それが一つや二つではない。いくつも残されており、中には祠堂全体がすっぽり巨木の根で覆われているものさえあり、その相貌は人為を超えた凄絶な美しさを備え、さらながら、遺跡そのものが、自然が継続する芸術の殿堂のような遺跡である。

門」を建造した日本人彫刻家外尾悦郎氏である。彼は現在も「キリストが生を享けた地上界」を表現するのだと言つてハンマーを打ち続けている。私達がこの教会を訪れた時、偶然正面で出会い、話を聞くことができたが、その目は神を観た人間のように透徹していた。

その後、北海、バルト海、フイ

ある。そんなわけで、ここは観光客が多い。観光客の中には遺跡そのものには興味がなくとも、この巨木の根に覆われた祠堂を見るためにアンコールを訪れる人さえいる。

シエムアップを旅立つた後シンガポールからマラッカ海峡を経てインド洋に入り、アラビア海、スペインのバルセロナに寄港。

そこではサグラダ・ファミリアを訪れた。アントニオ・ガウディ（一八五二～一九二六）の未完の作品で、彼の死後ガウディが設計した構想を推測しながら現在も建設が行なわれている。完成予定は

ガウディ没後百年後の二〇二六年だが、完成すると高さ一七〇メートルの宗教遺跡最高峰のキリスト教会となる。内陣はほぼ完成して竣工を眺めて過ごしたが、太陽が西の空を茜色に染めて海に沈んでいた後、バイヨンで見た観音菩薩像の残像が水平線上に湧出して靈感を覚え随喜した。観音菩薩の妙音が潮風に乗つて暮れゆく海原に水輪のように広がっていくのを観知したからである。

(終)



サグラダ・ファミリア

第二十六期専門課程スタート



河波昌先生と二河白道壁喰図

二十六期専門課程の授業が十一月より始まりました。専門課程受講生は六十六名と昨年と比べ大幅に増加。全コースで催行の運びとなり、浄土真宗コースが最大の十八名となりました。真言宗、曹洞宗とあわせてこの三宗が多くを占めるのは例年と同じ傾向ですが、各宗派とも五名以上の申し込みがありました。

また今期の特徴は、旧来、十一月から宗派別の開講としていたのを十一、十二月の二か月間は合同講義とし、一月からの三か月間は

佛教の多様性、すなわち大乗仏教における悟りと救いが仏教各宗派においてどのように展開しているのかについての理解を深めています。だくことが可能になります。

十一月第一日目は、基調講義と浄土宗の講義、二日目は真言宗と臨済宗の講義が行われました。まず大熊学監から、「釈尊入滅から大乗佛教の興起」と題し、大乗佛教を部派佛教との比較の視点からお話しされました。

昼食をはさんで浄土宗の講義です。

東京練馬区光明園主、河波昌

先生からは浄土宗の特徴として、

宗教として他宗教との交流がある旨の興味深いお話をありました。

後半、谷慈義師から現在の浄土

宗義において重要な、曇鸞、道綽、

善導各大師の浄土思想についてお



根岸宏明師



講義される形山睡峰師

二日目は真言宗講師、鹿嶋市地蔵院住職の根岸宏明師より、弘法大師空海の生涯をたどりつつ、真言宗の教えについての紹介がありました。「密教とは現象世界の奥にあるものであり、心が澄み切つていないと見えない」と述べられています。ところには実践主義的な真言宗の特徴が表れておりました。午後からは、かすみがうら市無相庵主、形山睡峰師より臨済宗の講義。まず日本佛教の歴史に触れた後で、『雜阿含經』の一部を引いて十二因縁・五蘊についてお話しされました。「仏教とはいから心を安心させるかであり、その安心は理屈ではない」とおっしゃる所は禅者らしさを感じます。

十二月は天台、日蓮、曹洞宗に加え、大洞塾長の講義が行われる予定です。

平成二十六年度(令和元年)度 勧學生募集開始まる

東京国際仏教塾は平成二十六年度塾生募集を開始します。

入塾説明会は平成二十六年二月

二十二日(土)、第二十七期開講式(兼

第二十六期閉講式)は四月十八日(金)

東京大学仏教青年会館にて。駒澤大

学名誉教授の奈良康明先生が記念

講演をなさいます。

お知り合いの方で、興味をお持ちの方がいらしたら是非お勧め下さい。詳細は仏教塾事務局まで。

報道 金剛界結縁灌頂

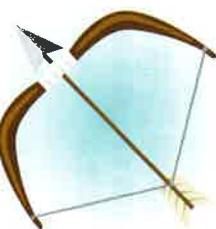
二十五期 本田 武夫

高野山真言宗の出家得度をめざす、二十五期修了生を中心としたメンバー十人は九月三十日～十月一日、高野山に赴き結縁灌頂を受けたのちに万燈会を見学しました。千二百年続く伝統行事に仏教の深遠さに触れる思いがし、その壯厳たる儀式を前に私たちは決意を新たにし、十二月の得度をめざして更なる精進を誓い合いました。



にせ弓術士のうぬぼれ

きゅうじゅつし



昔、バーラーナシーの都でブラーマセーナが國を治めていた頃のこと。チュツラヌッガハといふ名の男の子がおりました。彼は成人するとなツカシラーの町へ行き、様々な学問や技芸を修め、弓術ではだれにも負けないだけの技術を持つようになりました。

彼は自分の持つ技術と才能を生かしてくれる王に仕えたいと思いましたが、ただ一つ、悩みがありました。それは、背が小さく、おまけに腰が老人のように曲がつて、自分の姿でした。

「こんなに背が小さく老人のような姿では、雇つてもらえないだろ」とから身代わりになる男を探して、うから見つけ、ビーマセーナと云う名の彼に自分が描いてきた考えを伝えました。

「しかし、もし王様にあなたのことを尋ねられたら、どう答えたら?」「弟子だと答えればいいのです。後は私に任せておきなさい」

チユツラヌッガハは、ビーマセーナを連れてバーラーナーの都に向かい、王を訪ねました。二人は、宮殿の中の王の前へ通されました。もちろんチュツラヌッガハは、ビーマセーナの弟子として、後ろから従うようについていました。王が「お前たちは、何の用で私に会いに来たのだ」と尋ねると、ビーマセーナはもつたいぶつた口調で「王様、私は天下にただ一人と言われた弓術士です。私をぜひ、王様の家来として雇つていただきとう存じます」と述べ、うまく話がまとまり、王に仕えることになりました。何か事が起こっても、チュツラヌッガハが代わつてうまく解決してくれたのでした。

チユツラヌッガハが「もういいから、家に帰りなさい。後はわたしがうまくやつておくから」と言つて、ビーマセーナはすぐ戦場を逃げ出しました。チュツラヌッガハは戦いの先頭に立つて敵の陣営を破り、おまけに敵の王までとらえて城へ戻つてきました。王はビーマセーナのことを聞いて、チュツラヌッガハに言いました。

「なぜお前は姿かたちにとらわれたのだ。たとえ姿かたちがどうであろうと、本当に力と知恵を身につけたものこそ尊いのだ。」

王はチュツラヌッガハに地位と名譽と財産を与え、彼をたたえました。(ジャータカ八〇)

するようになりました。
折も折、敵の国が攻め寄せてきました。ビーマセーナは王から戦いましたが、チュツラヌッガハには、一言も相談しませんでした。ビーマセーナが城門を出、わずかばかり進軍すると、もうそこは戦場でした。先頭に立つて勇ましく城を出たまではよかつたのですが、真っ先に敵の弓矢を受け殺されることは自分かもしれないと思うと、言いようのない恐怖がビーマセーナの体を締め付けました。全身は震えだし、何度も象から落ちそうになりました。

師走に入り、今年も残すところあとわずかになりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。私が転倒して左足を骨折してしまい、現号は執筆がはかどるという「効果」もありました。

専門課程の講義も始まり、その中で安心について触れていたご講師がおられましたが、人間は感情が進んでいるようですが、先人の英知に届くのはいつのことでしょうか。では、よいお年をお迎え下さい。

編集後記

発行所 東京国際佛教塾
発行月日 平成二十五年十二月十日
東京事務所 160 東京都荒川区町屋一丁目一
編集人 峯島秀暢 作道忠夫
発行所 東京国際佛教塾
印刷所 大野印刷所 佐藤ビル
郵便振替番号 00120-4-78625
購読申込は年間送料共二千円を添え
次第にチュツラヌッガハをばかにしたことでもかかわらず、それを自分
の力だと思い違いをしてしまい、
次第にチュツラヌッガハをばかに思
うる。王はチュツラヌッガハに地位と
名譽と財産を与える。彼をたたえた
のでした。